

第十三章 弥陀の本願不思議におわしませばとて、悪をおそれざるは、また、本願ばかりとて、往生かなうべからずということ。この条、本願をうたがう、善悪の宿業をこころえざるなり。

第十四章 一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしということ。この条は、十悪五逆の罪人、日ごろ念仏をもうさずして、命終のとき、はじめて善知識のおしえにて、一念もうせば八十億劫のつみを滅し、十念もうせば、十八十億劫の重罪を滅して往生すといえり。

第十六章 信心の行者、自然に、はらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあいて口論をましては、かならず回心すべしということ。この条、断悪修善のここちか。

第十八章 仏法のかたに、施入物の多少にしたがいて、大小仏になるべしということ。この条、不可説なり、不可説なり。比興のことなり。

歎異抄異義篇 本願の機であることを知らず
専修賢善計
(第十三章・第十四章・第十六章・第十八章)

第17組 幸福寺住職

楠 信生

text by Shinshou Kusunoki

専修賢善計の諸相

先月の誓名別信計（誓願不思議と名号不思議を別のこととして信ずる異義）に対して、今月は第十三・十四・十六・十八章を専修賢善計という観点から拝読させていただく。

まず、各章の意義とその問題点を簡略に述べる。

第十三章は「悪をおそれざるは、また本願ばかりとて往生かなうべからず」という異義。これを了祥師は「罪悪を怖畏する」異義とおさえられる。(妙音院了祥『歎異抄聞記』) 本願を信ずることができず、よって自らの宿業も自覚することができないという問題がある。

第十四章は「一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべし」という異義。了祥師は「念仏して罪を滅する」異義といわれる。罪を消さなければ落ち着かないという思いは、自分の罪から眼をそらそうとする心でもある。そのことは、如来の本願の広大なる世界を知らないという問題である。

第十六章は「信心の行者、自然に、はらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあいて口論をましては、かならず回心すべし」という異義。了祥師は「自然に回心する」異義といわれる。これは、「この条、断悪修善のこ

こちか」といわれるように、回心の意味を全く誤解しているものである。回心とは、本願との出遇いによって常没流転の凡夫が自分のところをあてにしているは助からないという自覚であって「さすがよからんものをこそ、たすけたまわんずれ」という自力の向上心とは異質なものである。

第十八章は「仏法のかたに、施入物の多少にしたがいて、大小仏になるべし」という異義。これを了祥師は「施量 報を別にす」といわれる。この異義について『歎異抄』の作者は「この条、不可説なり、不可説なり」と、つよい語調で言語道断であることを述べている。そして、衆生の深信こそが本願の本意であると。煩惱具足の凡夫という自覚の欠如した高みにいることが本末転倒である。

専修賢善計で問題とされていること

弥陀の本願が悪人を選び捨てないからといって罪悪を恐れないのは、本願に甘えているのである。こうした考えは、一見常識にかなったものである。ところがこれが異義であるとされる。その理由は、本願を疑い「善悪の宿業をころえざる」からといわれる。つまり私たちの行為（身口意の三業）は制御可能な自由意志の下にあるのではなく、内在する善悪の業（宿業）によっている。

「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」という自身が、自分の思いを越えて活きているのである。そのような自己を知らずに「悪をおそれ」「後世者ぶりをして」「賢善精進の相をほかにしめして」生きることこそが「本願をうたがう、善悪の宿業をころえざる」あり方といわれる。

専ら念仏を修めるといふ形を取りながら賢善精進をはからうというあり方の行き着くところが、「すべて仏法にことをよせて、世間の欲心もあるゆえに、同朋をいいおどさるる」という現実である。賢善精進で生きることが、内心の差別を助長するという矛盾を抱えている。専修賢善計で問題とされているのは、自らが本願の機・宿業の身であることを忘れていくということである。

親鸞聖人が「信巻」の真仏弟子釈で悲歎述懐されて、

誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし

と述べておられる。真仏弟子とは、金剛心の行人つまり本願の機として、恥ずべき傷むべき身を生きていることなのである。